



長野県議会議員

# 百瀬 智之



2023年2月8日に  
尾木直樹さんを  
県政報告会にお招きして  
特別講演会・対談を  
実施しました。

ももせ  
ともゆき

- 1983年2月4日生まれ
- 穂高幼稚園卒園
- 山形小学校卒業
- 鉢盛中学校卒業
- 松本深志高校卒業
- 中学校・高校はサッカー部
- 中央大学法学部法律学科卒業
- 上智大学法科大学院修了
- 元学習塾経営
- 衆議院議員を歴任

### 県政報告 テーマ①

## 尾木ママとの対談で

過日、教育評論家の尾木ママこと、尾木直樹さんを県政報告会にお招きして特別講演会・対談を実施しました。講演会のテーマは「子どもも大人も居心地の良い学校・家庭・地域社会を目指して」。尾木さんは「子どもたちとともに社会を生活している感覚を、日本はもっと持っていかなければならない」と呼びかけられていました。

確かにコロナ禍によって、日本の学校教育に大きな問題点があることが浮き彫りになりました。その典型が、コロナ禍による休校中や学級閉鎖中、子どもたちは先生からの指示・発信がないと何をしたいかわからず、学ぶことをやめてしまうという点でした。日本の子どもたちは言われたことはその通りやり遂げますが、自立した学びをグイグイとやる傾向にはありません。それは何故なのか。2023年2月定例会の県議会一般質問ではこの点をテーマに知事や教育長らと議論しました。



### 県政報告 テーマ②

## 自立した学習者を育てる

小中学校の授業風景を思い浮かべるとき、一人の先生が教壇の上から30人ほどの児童生徒たちに向かって一律一斉に知識を伝達する授業スタイルは、昔から変わりません。学校ではみんな「同じことを、同じように正解する」ことが求められ、全ての子どもたちに平等な教育機会を提供することには成功したものの、一方で過度な同調圧力や正解主義を生む結果となりました。それが子どもたちの自立性や創意工夫する力を削ぐ一因になっているので、この点を改革していきましようとは訴えています。

また一所懸命に働けど、子どもたち一人ひとりに寄り添えないと悩む先生方は少なくありません。教師は一定の指導スケジュールに従って、目の前の30人ほどの子どもたちが単元を習得したという「仮定」のもとに授業を次へ次へと進めていきます。ですが実際には、理解が追いついていない子どもたくさんいます。ある科目が苦手な子には基礎的なことをもっとやらせてあげたいし、逆に得意な子にはもっと伸ばしてあげたい。そういう願いが今、少しずつですが形になるうとしています。





## 個別最適な 学びの将来像

体育や図工の授業は「いつものクラス」で皆と一緒に受けながら、国語や算数は自分の学習進度によって受講するクラスを選ぶ。そんな「習熟度別クラス編成」をとっている小学校を先日訪問させて頂きました。苦手な科目はゆっくり、じっくりと得意な科目はどんどん、次へ次へと。子どもたちが目を輝かせて学習していました。このシステムの下では自分には何が分かって、何が分からないのか、自己認識を磨く力も養われます。長野県は習熟度別クラス編成の導入率が全国水準より低いので、今後の検討課題の一つでしょう。

また新年度より長野県は「個別最適な学び研究事業」を始めます。念頭に置かれているのは子どもたちが学び方を自ら選択し、自分のペースで学べる環境づくり。子どもたち一人ひとりが自分で学ぶ、仲間とともに学ぶ、教師の説明を聞いて学ぶ等、多様な学び方が促されます。教師は「教える人」ではなく、子どもたちの自立的な学びを実現するための「環境をつくる人、サポートする人」として存在します。

これらを通じて子どもたちの“わからない”が自発的に解消され、“得意な科目”については小学生でも中高生の問題にどんどんチャレンジできるような将来像を目指しています。



### 「保護者の方々と、 対話を重ねてきました」



## 先進的なインクルーシブ 教育の展開を

もう一つ重要なことに、インクルーシブ教育の充実、即ち障がいの有無に関わりなく全ての子どもたちに平等な教育機会を提供することが今日的な課題となっています。その背景には発達障害児の増加があります。例えば2022年度、県内には国立を除く小中学校・義務教育学校に7075クラスあり、このうち1581(22%)が特別支援学級です。10年前と比べて462増え、割合が7ポイントも上昇しました。新しい教室や教員の確保が県下の課題です。

大切なことは、このように特別な支援を要する子どもたちを時間的・場所的に隔離することが「孤立的な学び」につながるものであってはならないということです。実はいま世の中で注目されているのは、子どもたちを特性ごとに小分けに教室分離させていく学校ではなくて、一つの空間に複数の教員が入って個別サポートを充実させている学校です。支援を要する子どもたちもできるだけ多くの時間を「いつものクラス」で過ごせた方が、まわりの児童生徒にとっても寛容性や思いやりの心が育まれるとされています。長野県はその点を踏まえた仕組みづくりが大事だと、先の一般質問では述べさせて頂きました。



### 「子どもたちと、 心を交わして きました」



## 教育県の原点を忘れない

かつて教育県と称された長野県。その呼び名は山国でありながら江戸や明治の時代に識字率・就学率が高く、庶民教育が普及していたことにあるようです。思うにそれは「昔から長野県民は勉強がよくできた」ということよりも、「一昔前からあまねく多くの人々に学習の機会が平等に開かれていた」ことが長野県の特徴だったと言えるのではないのでしょうか。

県下全ての人に開かれた個別最適な学びの実現に向けて、長野県は再び新たな歩みを始めています。これまでの学校現場でよく見られた「同調圧力」「正解主義」を見直して、公教育においても子どもたちが自分の個性や特色に応じて、自分なりのペースで学習を進められる時代に入りました。子どもたちがいきいきと学習に向き合う姿を思い描きながら、あるべき公教育に向かって地域一丸で取り組めるよう、これからも尽力して参ります。

### すべての季節を通じて街頭でも “県政報告”やっています！



SNSでは  
毎日県政報告中!!



百瀬智之 検索

<https://momose-tomoyuki.com>

